

3.1. 末吉 興一氏（公益財団法人アジア成長研究所 名誉理事長・元北九州市長）

「感性の新しい人たちとともに、他の都市にはない『北九州市の個性』を伸ばしていく」



末吉 興一（すえよし こういち）

東京大学法学部卒業後、建設省（国土交通省）入省。自治省（総務省）大臣官房地域政策課長、建設省河川局次長、国土庁（国土交通省）土地局長を経て、1987年2月より北九州市長を5期務め、2007年2月退任。現在、公益財団法人アジア成長研究所 名誉理事長。

「広い世界を長い目で見て、しっかりとした議論を」

私は昭和9年生まれ。母方が城野の練兵場で味噌や醤油を商っていた家の生まれでしたので、そこで、私は小倉に縁ができたのです。

幼少期は大分県の竹田で過ごしたのですが、戦時中でもあり、学校に行ったら校舎がないという時代の中、資格さえ取れば、勉強さえすればということ言われていました。そうなるべくと国家試験しかないので、国家公務員試験を受験し、合格しました。

実は私は政治家には望んでなかったわけではありません。「北九州市長にはお前がいい」と、推薦してくれる人がいて、本を読んで勉強すれば良いということでしたので、目的をしっかりと見つけたら、本の内容を覚えることは造作もないことです。ただ体力がなかったし、貧乏にも慣れていました。運が良かっただけです。意外とたくましいところもあるかもしれません。負けてもともと、やってみるかということで、なり手のいないところで立候補することになりました。まさか大都市のトップになるとは思ってもいませんでした。

（市長を務めるなかで）やさしい局面はありません。みんな難しいことばかりです。これは政治家になってみてわかりました。これからは、広い世界を長い目で見てくれる政治家が競争

し合ってほしいと思います。議論倒れになってしまうこともあります。議論はしっかりとした方が良いと思います。

「ルネッサンス構想に込めた思い」

（市長時代の構想である）「北九州市ルネッサンス構想」についてお話しします。厚生年金会館で討論会をやったとき、聴衆（市民）が「ルネッサンスよりアデランスのほうが先！」という発言があり、会場が大爆笑になって、それ以上演説のしようがありませんでした。私は落語が好きなので、「おあとがよろしいようで」ということで、和やかに会を閉じることができました。ヤジを飛ばした男性は私と同年齢でした。後日お詫びに来ましたが、私はむしろ、固い雰囲気（霧）の討論会場を和ませてくれた男性に感謝しました。

「ルネッサンス構想」のネーミングアイデアについては、当初からカタカナを使おうと思っていました。支援者にマスコミ関係の方がいて、固い言葉、四文字熟語（列島改造・所得倍増等）はやめて、カタカナを使おうということになったのです。ルネッサンスには復興、再生という意味があります。構想を作るときは、難しい漢字を使わないようにしようとするタイミングで、時流には乗れたと思います。

マスコミのキャッチフレーズのつくり方を参考にすることが大事だと思います。広告の世界ではキャッチフレーズのつくり方が変遷してきています。悩んだら良いものが出るとは限りません。時代の先端を歩いている人が響くものを作る必要があるのではないのでしょうか。

ただし、一度響いたからといって、それが響き続けることはありません。理屈ではなく、感覚の新しい人に聞いていくことが大切です。政策自体よりも、キャッチフレーズに重心が移っています。新鮮な感じがする、アツと思うようなキャッチフレーズがうけている一方で、有効期間が短いですね。キャッチフレーズは、ムードや地域性が大切だと思います。

「北九州市の個性を伸ばす」

北九州市民に対してはフランクにやったほうが、受けが良いと思います。負けず嫌いなどころもありますがね。

フランクを心掛けたというより、そもそも、私自身がフランクに育ってきた経緯があります。北九州市における地域性や気性があります。建設省に入ったとき、九州だけでなく、よその省庁や、他の地域にも行きましたが、九州には独自の気質があると感じました。

同じ九州でも小倉の根性と、博多の根性は違います。（小倉の根性である）負けず嫌いな根性も大事です。競争というのはそういうものです。

ですので、北九州市の個性を伸ばせば良いでしょう。北九州市の個性とは何か。それを伸ばし、グループの中で飛び出れば良いのではないのでしょうか。一方で、東京と同じことはやれません。北九州市でできることは何か、ということを考えれば良いでしょう。違う個性を伸ばせば良いのです。

よそがやっているから、俺もやろうということは、よくありません。北九州市には他にない特徴がたくさんあるのですから。